

り度考に御座候

私の留学の期ハ過ぎ既に歸朝の途ニ上るへき筈ニ御座候へ共幸ニ此の期會ニやつて歸り度と存じ數ヶ月延引いたす譯に御座候 何卒御承知を願上候 就ては為念文部省への延期届を封入いたし候 必用ニ有之候へは何分とも宜敷様ニ御取斗ひ懇願申上候〔下略〕

素明は帰国後大正十四年九月に高島屋で滞歐紀念洋画展覧会を開いた。

⑤ 古画模写事業と模本展覧会

大正八、九年の頃より本校では古画研究、保存を目的とする模写事業の計画が起こり、日本画科卒業生による模写が行われ、作品は文庫に収められた。まとまった記録は残っていないが、本事業の推進者は結城素明と松岡映丘であったと考えられ、また、本学芸術資料館の台帳を見ると大正九年以降日本画科卒業生による模本の収録が数多く見られるところから、それらがこの事業の成果に該当すると考えられる。左記はその大正九年より十三年までの分である。

大正九年

吉村忠夫納入「方服披着法図」「過去現在因果経」

服部謙一納入「雪中御幸絵巻」

福田久也納入「本醍醐寺五重塔内四壁所貼菩薩像板絵」

塚本閣治(図案科卒)納入「職人盡」

同十年

渡辺幸雄納入「顧愷之女史箴並書」「金胎仏画帖ノ内金剛界曼荼羅」

日本画科納入「扇面古写経」

田上尚之納入「彦根屏風」(半双分)

同十一年

福田久也納入「太子絵伝」

吉村忠夫納入「太子絵伝」「金光明王絵」

服部謙一「蘇武」「扇面古写経」「太子絵伝」「柿の本人磨像」

大貫賢納入「売貨郎之図」

田上尚之納入「一遍上人藤沢道場」「一遍上人絵詞」「美人之図」

池田幸太郎納入「仇英十美人」

常岡文亀納入「燉煌発掘壁画摸本」(伊藤孝太郎、渡辺幸雄、常岡文亀、根上富治、小野虎雄、勝山重英、鷹巢豊治、畠山

錦成、吉田金吉、山田廉模写)

同十二年

田上尚之納入「津軽家蔵岩佐又兵衛筆浮世人物」

西保納入「頼焼阿弥陀縁起」「山菜筆少年調馬之図」

同十三年

鷹巢豊治納入「後藤祐乘画像」「後藤徳乘画像」「後藤栄乘画像」

伊藤孝太郎納入「後藤徳乘室画像」「西脇家蔵法然上人絵伝」

原田興家納入「李龍眠瀟湖臥遊図」(小村雪岱模写)

小村泰助納入「北野天神縁起」 「敵島神社藏平家納経絵」 「石
山寺藏石山寺縁起」 「神護寺藏山水屏風」 (吉村忠夫摸写)

「歎喜光寺藏一遍上人絵伝」 (岩田正巳摸写)

西保納入「松浦家藏王若水筆梅群鳥図」

田上尚之納入「前田家藏一遍聖絵」

鈴木六三郎納入「吉祥天厨子扉絵」 (鈴木六三郎、服部謙一、

福田久也、吉村忠夫、高木保之助摸写)

右の摸写名の無い作品は納入者が摸写したものと考えられる。なお、これ以降も鷹巢豊治、田上尚之、伊藤孝太郎、福田久也、日下喜一郎、吉田幸三郎その他日本画科卒業生による摸写作品が数多く台帳に登録されている。

この摸写事業は関東大震災によって多数の名品が失われたことを契機に一層重要性を増した。本校ではその機会に世の関心を高めるため、校内で摸本展覧会を開催した。各紙がこれを報じたが、大正十二年十二月七日の『大阪朝日新聞』には次のように記されている。

東京美術學校で古名畫の摸寫複本展覧會

東京の美術學校では七、八、九の三日間校内に同校の手で作製した東洋古名畫の摸寫複本の展覧會を催し併せて同校所藏の過去現在因果經、吉祥天厨子扉繪、雪見御幸繪その他數種の名畫原本を陳列して有志の觀覽に供する。同校が突如斯うした展覧會を開くに至つたのには理由のあることである。

由來名畫摸本といへばどうしたものか輕視され勝ちで、その價值

については極く特殊の場合のほか殆ど考へられない實情である、所が今度の震災の結果は痛切に摸本の價值とその要を語つたのであつて例へば駿河臺内田蕉作氏所藏の慶忍筆新過去現在因果經は同家の焼失と共に焼けて了つた、摸本の無い悲しさには再び同名畫の面影に接することも出来なくなつた、一方に先年啓明會が一萬圓を提供して永田春水、井上白楊兩氏を大英博物館に派して摸寫せしめたるスタイン氏燉煌發掘壁畫二十幅は大學美術史研究室で焼失したが幸ひにも美術學校が再摸寫をして置いたので、同じ價值に於て残ることになつた、三四年前から日本畫科の教授が監督して盛んに名畫の摸寫を行つてゐる美術學校が研究の上からも保存の上からもいよゝゝその要を迫られたのは當然で、この際同校は摸本の本領を一般的に宣傳し、今後同事業進展の上に資さんとして同展覧會を催すに至つたのである、十日には特に東伏見宮妃殿下も御成りあらせられ、同展覧の摸本作製の狀況をも御覽遊ばす筈である、同校文庫の北浦「大介」主任は語る

今度摸本と原本とを兩方陳べるのは摸寫するといふことは原本を汚損しないかといふ世人の懸念に對して、決してさうした危険が伴はないといふことを諒解して貰ひ且つは如何に精巧に摸寫し得るかの範例を示し度いばかりで、今後は若し許されるならば摸本二通を作つて東京と京都と兩方に保存して置くやうにし度いと思つてゐる(東京電話)

なお、本校の摸写事業について大正十二年十二月三十日の『都新聞』は次のように紹介している。

古名畫の模本製作

來年は山水屏風と嚴島經卷模寫

東京美術學校では從來卒業生在學生をして當らしめて居た古美術模寫事業が、既に第二期を終つたので、來春早々第三期に着手する筈で、教授松岡映丘氏が過般京都方面に出張し原畫借入の交渉を纏めて來たが、來年度に先づ着手すべきは嚴島經卷と、高尾神護寺の山水屏風である

嚴島經卷は全二十八卷で之に無量義經、觀音賢經、阿彌陀經、摩訶般若波羅密多心經、大樂金剛不空眞實三摩耶經の五卷がついて居る、平家一門の人々が寫經して奉納したものだ、藤原時代の寫經裝飾の代表作で、金銀切箔等を惜氣もなく用ゐ、扉繪の繊細典雅なことも驚くべきもので、模本としては、田中親美氏が十數年の歳月を費してやつたものが、今年の春三溪園の大師會に出品されたが、美術學校が之をやることは實に當を得て居る、模寫の執筆は服部有恒氏外三名位が擔任し、尙吉村忠夫氏之に参加する筈である

之に次いで、高尾神護寺の山水屏風は、吉村忠夫氏が二月に入浴して熱心に之をやる筈であるが、約一ヶ月位はかゝる筈である之は藤原時代に於ける公卿の生活振りを描いたもので、その筆致は極めて優雅で、後世土佐派を生んだ根源とされて居る、尙此の二者が出來ると、信貴山縁起等に移り漸次此種のものを描へて行くさうである

模寫は下村觀山氏あたりも熱心にやつたもので、高野山の二十五菩薩來迎圖などは殆ど原物と判別つかぬ位よく出來て居る、來

年は必ずやかうした仕事も盛んになり行くであらう。

⑥ 関東大震災

大正十二年九月一日の大地震の際、本校は夏休み中とあつて事務職員と彫刻科生徒の夏季研究会会員が登校していただけであつたが、幸にして校内からの出火もなく建物の損害も少なかった。特に文庫收藏の美術品が概ね無事だつたことは僥倖と言わねばならない。ただし、大地震の後、東京市内各所から生じた火災は大火災を引き起こし、そのため百三十万人近い市民が公園や寺院、神社その他の避難場所に殺到した。なかでも上野公園は最大の避難場所となり、本校にも群衆が押し寄せ、それに対応するため本校は十月三十日までの二ヶ月間を休業とし、その代りに冬休みを廃止した。

震災に関する本校の公式記録と看做すべきものには先ず「東京美術學校震災救護施設状況調」(自大正十一年文部省往復書類^{掛務}に収録)がある。これは臨時震災救護事務局より文部省を通じて照会があつたために本校が作成した文書である。次に「震火災ノ際功績者調査」(大正十一年職員ニ関スル書類^{掛務}に収録)がある。これは震災同情会長より文部省に照会があつたために本校が作成したものである。ここには前者を掲載するが、外に準公式記録として『東京美術學校校友会月報』第二十二卷第五号「震災記念号」が発行されており、特に同誌所収の鈴川信一(体操および遠近法授業講師、教務掛主任兼庶務掛、陸軍歩兵大尉)著「震災日記」には九月一日から同五日までの校内の異状なさまが如実に記されているので参照されたい。なお、『東京美術學校の歴史』(桑原実監修、磯崎康彦、吉田千鶴子著。昭和